
another final weapon

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

another final weapon

【Nコード】

N1301A

【作者名】

アキ

【あらすじ】

もうひとりの「最終兵器」のストーリー。

a r g u m e n t

暗い——何も見えない、どこだここは…

遠くで人の声が聞こえる…

「ちせに対抗する手段はこれしかないのです…」

「しかしこれは神に反する行為だぞ！」

「もう我々は充分神に反する行為をしてきたではないか！それに私はこれ以上我が国に死者をだしたくない！」

——どうやら口論のようだ…

だが何についてだろう？「ちせ」に対抗する？神に反する？何を言っているんだ？

しばらく沈黙が続いたあと重苦しい声で「仕方がないのか…」と言う声が聞こえてきた

そして直後に俺の耳に不気味な機械音が聞こえたかと思うと同時に俺の意識はここで途切れた——

the ultimate weapon

(ドゴオオン！)

すさまじい轟音とともに俺はまた数台の戦車と何百人という人々を消した。

俺が「最終兵器」となってからもう一カ月がたつ、別にもう何を破壊しても何人の人々を殺しても何も感じない、いや感じられなくなつてしまつたらしい。

俺を造つた奴等の代表のカインと名乗る男は「ちせには一つの欠点がある、それは悲しみという感情があるからだ。

ちせにそれがあるかぎり悲しみ、つまりは他人への情けを持たないオマエの方が強いんだよ、リーパー」と言つていた。

どうやら俺の悲しみという感情は奴等によつて消されたらしい。

それと一つのまにか俺にはリーパーという名前が付いていた

リーパー・reaper 英語で死の神という意味があるらしい。

別に俺はなんと呼ばれようがかまわない。

俺はもう自分の名前を忘れてしまつたのだから。

俺は今、最終兵器となつたその日からの記憶しか持つていない、おそらくそのまえの記憶は感情とともに消されてしまつたのだろう。

だから俺がどう呼ばれようともどうでもいい。

ただ全てを命令のまま破壊する…それだけでいいじゃないか。

c h i s e ?

奴等の言う「ちせ」とは何だろう？

なぜ奴等はそんなにも「ちせ」を恐がるのだろうか？

俺が造られた理由も「ちせ」と対抗するためだ、つまり「ちせ」とは俺にとって存在価値でもあるのだろう。

俺はその質問を俺の監視役でもあるカインにぶつけた。

返ってきた答えは「「ちせ」とはオマエと同じ最終兵器であり、最大のテキだ」

それだけだった。

だが俺は驚いた。俺の他にも自分の身体を兵器とされたものがあることに。

そして会ってみたくなった、世界に二人としない俺と同種である「ちせ」という人に――

first contact

そのチャンスは意外にも早くおとずれた、俺の国がJAPANのオサカクウシに襲撃をかけたのだ。

駆け付けてきた「ちせ」のJAPANの国旗を羽に書いたその姿は俺とは違い天使のようだった。

俺の国は俺をあたりまえのように戦いの前線に置いた。

そりゃ最終兵器には最終兵器でしかかなわないからあたりまえだ、だが「ちせ」との戦いの結果はひどいものだった、

造られたのが「ちせ」より遅い俺と彼女との兵器の成長具合は違いすぎていた。

「ちせ」との戦いで俺は腕をもがれ、羽を破壊された。

俺は必死で逃走した。いくら兵器でも自分が消えてしまうというのは恐怖以外の何者でもないからだ。

そして俺の国の軍は俺が離脱したせいで壊滅的なダメージをつけた、あたりまえだ、あんな恐ろしいモノに非力な人間が勝てるわけがない。

「ちせ」が去り戦いの後始末がおわると俺は俺を造った人間達にクズ呼ばわりをされるようになった。

まあ、俺は「ちせ」を倒すために造られたのだから「ちせ」にかなわない俺を奴等が邪魔者扱いするのはあたりまえだ。

そして奴等は俺の回復を待つために俺を牢屋にぶちこんだ。

牢屋暮らしをしながら俺は思っていた、逃走中に見た「ちせ」が目から体液を流し「ごめんなさい」と言いながら俺の国の軍隊を壊滅させていった光景を

(なぜ彼女は謝っていたんだ?)

i n t h e p r i s o n

俺が牢屋に入れられてから今日で半月ほどがたつ。

もう俺の身体は完全に回復していた、ちぎれた腕はまた生え、破壊された羽は前のより巨大に強力になり復活した。

だが俺にまだ釈放、出撃命令はでない、さすがに不思議に思った俺は周囲にいる俺の国のお偉い方の話し声を耳の感度を良くして聞いてみた。

どうやらこの国はあまりの戦力不足から他の同じような国と軍事協定を結び連合国となって「ちせ」を保有するJ A P A Nに対抗することとなったようだ、

幸い最終兵器である俺を保有する俺の国は連合国側でも優遇され様々な国からの物資援助、軍人の補給がおこなわれたらしい。

別に俺にとって今、俺の国がどうなっているのかはどうでもいい。

俺が今考えるのは

「いつ俺は戦えるのか」

ということだけだ。

特に俺の身体の中の兵器はいつでも臨戦体勢となっており、はるか遠くのテキの調査機にさえ反応し、激痛をともないながら俺の腕から背中から全身から武器や羽が飛び出そうとする、その反応を止める手段は俺を造った奴等からもらった大量の薬だけだった。

（―戦いたい、これ以上戦わないと俺は狂ってしまう）

night attack

半月ほど牢屋に閉じ込められている間にいろいろなことを考えた「ちせ」が戦場で謝っていた理由、俺を造った奴等が考えていること、

この戦争の意味など、とにかくたくさん。しかしどれにも答えなど出なかった。

それは人としての感情の足りない俺が深い人間の心理などわかるわけがないからだろう。

その日も俺自身の中の兵器に苦しまされていると、ゆっくりと牢屋の扉が開いた。

そこに立っていたのはもちろん奴だった。

カイン「リーパー、出撃命令だ」

奴はそう言うとその計画について説明し始めた、

奴の話によるとなぜだか今夜は「ちせ」が自軍から離脱しているらしいのでその機を狙い俺を中心とした少数精鋭のチームを結成してJAPANのカントウへの夜襲をかけるらしい。

だが俺は奴等にできるだけ大きな爆発は控えろと言われた。

それは爆発のせいで「ちせ」が戦線に復帰してくるのを恐れたからであろう、まあどちらにしろ俺は戦えればそれでよかった。

はつきりいつてその襲撃は楽だった。テキは俺の姿を見て逃げようとする者ばかりだったからだ。

一人だけ頭に包帯を巻いた奴が果敢にも俺に挑んできたがやはり俺に傷一つつけられなかった、

俺はそいつの腕をふきとばすだけで苦しまないですむように頭を撃って即死させてやった。

そこの発見は意外にも「ちせ」がテキの兵達にしたわれていることだった。

それはテキ達がやたら「ちせ」の助けをもとめていたの様子から推測できた、

テキの中には自分の銃に「ちせ」のプリクラをつけている奴さえもいたぐらいだ。

俺とは大違いだ、俺は味方にさえも忌み嫌われ恐れられている、俺は仲間がいないことが悲しかった、

（ん？）

俺は気付いた、悲しみを持たないはずの俺が孤独に対するそれをもっていることに。

――なぜだ？俺の中にあるもう20%にも満たない「人」の心がその感情を生み出しているのか…？

俺はそんな疑問をいだきながらも目に移る全てのテキを排除し、その襲撃は俺の国を含めた連合国側の勝利で終わった…

encounter

カントウへの夜襲が終わった後、俺を中心としたチームは一時本国へ戻り、かわりに重装備をほどこした連合国軍が日本へと浸出していった。

俺は本国に戻ってから相変わらず牢屋暮らしをしながら小さな任務をこなしていった。

俺の国の上層部は俺と「ちせ」が戦場で逢わないように細工をしているらしい、それはまだ奴等が俺という戦力を失いたくないからだろう。

— 知りたい、俺がいつたい何者だったのかを、どこでどのように生きていたのかを。

牢屋内でいつからか、いやおそらく自分に感情があることに気付いた時から俺はそんなことを思い続けていた。

その日いつもと変わらず任務で俺はある街を破壊していた。

その時だ

「ケファ！」

不意に背後から大声でそう呼ばれた、

俺はなぜか反射的に振り向いていたそこには一人の女がいた。

おそらく逃げ遅れた女が幻覚でも見ているのだろうと思ったが彼女はあきらかに俺に向かって

「ケファ！ケファでしょ？」

としきりに聞いてきた。

俺は彼女のあまりの必死さに俺は口を開いた

リーパー「俺はリーパーだ、ケファなどという名称はついていない」

女「いいえ、あなたはケファよ、私がわからないの？」

正直どこをみて俺がケファという奴だと断言しているのが気になったが覚えて聞かなかった

リーパー「だれだ、おまえは」

女「ノアよ、わすれちゃったの？」

リーパー「ノア……？」

ノアもケファもどこかで聞き覚えのある名前だった、

だが俺が兵器になってからじゃない、いつだ？いつ俺は彼女と出会った？

それを思い出そうとすると俺の頭に激痛が走り、俺の意識はそこで途切れた――

d r e a m

―長い長い夢をみていた。

その中で俺はとても幸せそうに笑っていて、その隣で一緒に笑っているのはさつき出会った「ノア」という女性だった。

とてもとてもあたたかで幸せな夢だった―

目が覚めてまず目に映ったのはところどころしみのある天井だった。周りの感じからみるとどうやらここはどこかの家の部屋のベットの
上らしい、そんなことを考えていると近くのドアから夢に出てきた
彼女が顔を出した

ノア「起きた？大丈夫？いきなり倒れたからびっくりしちゃったよ」

リーパー「…ここはどこだ？」

ノア「ここは私の家。私のことわかる？ケファ」

リーパー「……………」

ノア「わからないの？」

リーパー「……俺は君との記憶を持っていない」

彼女はその言葉にひどく驚いたらしく、その目は少しうるんでいた。
俺は彼女のそんな様子を見てなんて言ったらいいかわからなくてと
にかく自分が彼女に今一番聞きたいことを聞いてみた

リーパー「俺が……怖いかな？」

ノア「…うつん」

嘘だ。

手から人を殺す兵器を出すモノに対して普通の人間が恐怖を抱かないわけがない。

そんな俺の表情を読み取ったのか彼女は口を開いた

ノア「だってあなたは私の恋人だもの」

リーパー「恋人…？」

ピーピーピーピー

突然場違いな機械音がした。

音の正体は俺を呼び出すために軍が俺に持たせたポケベルだ。

あわてて画面をみると

「イマスグキカンシロ」

それだけが表示されていた。

やはり奴等に俺をねぎらったり心配する気持ちはないらしいことが文面を見て感じられた、

それでも俺は基地に帰るためベットから立ち上がるとドアに向かった

ノア「どうしたの？」

俺はなにも答えずドアを開けて外へ出た

ドアが閉まる時、後ろから彼女の声が聞こえた

ノア「あとでまた来てね、話したいことがたくさんあるの、お願い」

リーパー「……」

俺は聞こえなかったふりをして軍の基地へ向かって飛び立った

human

基地で待っていたのは奴の怒声だった。

カイン「今までどこにいた！お前のせいでせつかくの空襲が失敗したではないか！」

衛星の情報で自軍が「ちせ」の不在の際に行なった「ちせ」の街への空襲が失敗したのは知っていた。

まあ俺が出撃しても結果は変わらなかっただろう

カイン「聞こえんのかリーパー！今までどこにいたか答える！」

リーパー「おまえに関係ないだろう、殺すぞ」

俺がそう言つと奴はひどく怯えた目をしていた、そんな奴を尻目に俺は足早にその場を離れようとした。

その時後ろから奴が

「この殺人兵器ごときが」

とさも憎そうに言ったのが聞こえたがあえて無視をした

最近俺はもう軍に対して怒りの感情しか持てなくなっていた。

―なぜ俺がおまえらに従わなくてはいけないんだ、

おまえらが勝手に俺を兵器にしたんじゃないか、

なぜ俺を選んだ、

なぜ俺を普通の「人」としていさせてくれなかったんだ…もし、も

し俺が人のままでいられたら……今頃はきつと……もつともつと……

その夜、任務を終えた俺は牢屋で仮眠をとろうとしていた。だが俺の耳には彼女―「ノア」が最後に言っていた「お願い」という言葉が残っていて、それが気になって眠ることができなかった。

（彼女だけは俺を「人」として見てくれているんじゃないか？）

そんな考えさえもが頭に浮かんだ

俺の体はいつのまにか牢屋を抜け出して彼女の家に向かって飛び出していた

t e a r

彼女の家に着き、静かにドアを開けて彼女がいるであろう奥の部屋に向かった。

部屋にいた彼女はもう寝てしまっていた。

その目の下は腫れていてついさっきまで「泣いていた」のがわかった。

人は悲しいと泣く。

悲しみか…言葉はわかるが、意味はよくつかめない。

―なぜ人は泣くのだろうか、そんなことをしてもなんの意味もないのに。

「ちせ」も戦いの時泣いていた、「ちせ」にとって何がそんなに悲しかったんだ？

そんな疑問をいだきながら彼女の―「ノア」の寝顔を見ていた俺はいつのまにかノアの唇に自分の唇を重ねていた。

その行為は俺の意志とは無関係に、まるで俺の体が俺のではないように勝手に動いて行なっていた。

そんな自分に驚きながらも俺の体は止まらず長い時間その行為を続けてしまっていた。

ノア「ケファ…なの？」いつのまにか彼女は起きていた
リーパー「……………」

俺はなんだか気まづくなってしまうて無言で立ち去ろうとドアのノブに手を掛けた

ノア「待って！なんで私から逃げるの…」

彼女の嘆きにも似た悲痛な声が後ろから聞こえた

（違う、違うんだ）

俺は心のなかでそう叫んでいた。

そして俺が何か言おうと振り向くと彼女はベットの上で涙を流していた。

俺は何も言えなくなってしまうてとっさに彼女を抱き締めた。

今彼女に何を言ってもいいことが言えないだろうから、なによりもう彼女の泣いてる顔を見たくなかったから

ノア「ケファ…ばかぁ、ずっと待ってたんだよ？」

ケファ「ごめんな…」

俺はそんな言葉を言うだけでもうせいっぱいだった。

live

俺と彼女はそのまま一言もかわすことなくずっとだきあつてた。

彼女の体は俺と違ってあつたかくて、彼女の心臓の音はまるでなにかの「うた」みたいでそれをいつまでも感じたくて、聞いていたくて、俺は彼女をずっと離さなかった。

―ああ。そうだった、「人」はこんなにもあつたかくてこうやって一生懸命心臓を動かして「生きている」んだっただけ――

俺が今まで殺してきた人たちもこんなふうに「生きていた」んだよな……

気付くと俺の目からは涙がでていた、彼女も泣いていた。

そのまま夜明けまで俺は彼女をずっと抱き締めていた。

彼女も泣きながら俺を抱き締めていてくれた。

―思い出さなければよかった。

人が生きていることなんて。

もし思い出さなければ今こんなにも重い罪を意識することなかっただろう

夜が明けて窓から朝日が射したころ彼女は口を開いた

ノア「聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

ケファ「…俺の体のことについてか？」

ノア「あ……うん」

彼女は街で俺が腕から武器を出しているところを一度見ているからこの疑問はあたりまえのものなのだろう

ケファ「俺は…最終兵器だ」

ノア「サイシュウヘイキ？」

ケファ「ああ、詳しくは俺もわからないけどとにかく…人を殺すために造られたものってことだ」

ノア「……………」

ケファ「…俺はもう何干って人を殺してきたんだ、それがどれだけ重い罪かなんて何も考えないで……」

バカだったよな俺。いっそ死んじまった方がいいのかもな」

本当に心から俺はその時自分の死を消滅を願っていた、何干という命を奪ってきていまさらその罪を背負って生きていようなんて考えられなかった。

a t o n e m e n t

ノア「……こうやって私達が話している間にも地球のどこかでは誰かが苦しんでいるんだよね、死んでいるんだよね、それなのに私達は何もしていない、何もできない。人は知らないうちにその人たちに罪を犯しているんだよね」

ケファ「……」

ノア「だから人は生きるの。その人たちへのせめてもの償いに。その人たちがなれなかったぶんだけ幸せになろうと一生懸命生きているんだよ」

いつのまにか俺はまた泣きそうになっていた。

ノア「だから人を殺してしまった人はその死んでしまった人が背負ってきた罪と一緒に背負いながら生きることと償っていかなければいけないの、たとえそれが自分のちっぽけな命すべてを使って償っても償いきれないものでも。そこでその罪の重さに耐えきれないからって逃げて死んでしまったらそれが全てに対しての罪なんだよ。生きていることは罪なんかじゃないの。だから死のうなんて簡単に思わないで……ね。約束して。」

ケファ「……ああ。やくそくする」

ノア「えへへ、偉そうな事いってごめんね？」

彼女はそう言っていると泣き出してしまった俺の肩に頭を乗せた

「俺は彼女が好きだ。そう気付いた。おそらく「昔の俺」もそうだったのだろう」

army's drug

―彼女と生きていこう。

俺が犯してしまった罪と正面から向き合ってこれから生きよう。
そうやって償っていこう、少しずつ、少しずつ、俺の命がつきるま
で―

ケファ「逃げよう、ノア」

ノア「え？」

ケファ「遠くへ逃げて一緒に暮らそう」

ノア「……………うん。」

彼女は目に涙をためてそう答えてくれた

俺はその日のうちに基地へ私物を取りに向かった、基地の内部では
俺がいなくなっていたことよりも仙台まで浸出していた連合国別隊
が「ちせ」によって全滅させられたことで騒がしかった。

カイン「リーパー！貴様あつ！」

いきなり俺は奴に殴られた。

カイン「貴様、今度はどこへお出かけしていたんだ？貴様がいなか
ったせいで私の…この連合国軍の戦力はまた激減したんだぞ！」

ケファ「…じゃあ、なんで戦おうとするんだ？こんな戦争に意味は
あるのか？戦わなければこんなにも人は死ななくてすんだらう？
こんなに悲しむ人もいなくてすんだらう？」

カイン「殺人兵器ごときがわかったような口をきくんじゃない！貴
様は我々の命令だけを聞いていればいいんだ！」

ケファ「俺は……………人だ」

俺はそう言って奴を殴り飛ばすと自分が収容されていた軍内の牢屋
に向かった。

そこで洋服やそんな物をしまつて最後に自分が持っているだけの「
薬」をカバンにつめた

―この薬がきれたら俺はどうなるのだらう…やはり死んでしまうの

か？

ここまできて軍の奴等が造った薬に頼らないと生きていけない自分がなさけなかった。

俺はさつさと準備をすますと牢屋の壁に穴を開け、「彼女」のもとへ向かった――

j o u r n e y

—もう軍には戻らない。これからは彼女と一緒に普通の「人」として生きよう—

そう決意して俺は彼女のもとへ走っていた。

俺の愛しい人のもとへ、ノアのもとへ。

もしかしてその愛する人と暮らすこと自体が罪ではないかと怖れながら—

空に星が見えはじめた頃俺は彼女のもとに着いた。

彼女は家の前で大きな荷物を持ちながら待っていてくれた。

ケファ「ごめん、ちよっと時間かった。待った？」

ノア「うん、へーき」

彼女はそう言って笑ってくれた

ケファ「……………行くか」

ノア「うん」

俺たちは手をつなぐとゆっくり歩きだした。どこか遠い場所へ向かって

昼は街を探して歩き、夜になると近くにある廃墟で身を寄せあって眠った。

昼、歩いてる間に彼女は俺が忘れてしまった二人の過去について話をしてくれた。

その話を彼女はまるで童話のように話してくれて俺は聞いていてもおもしろかった。

人がいる街で俺らはどう暮らそう、まあ先のことなんてわからない。ただ今はこの一瞬一瞬を大切に生きていこう、それだけは確かにわかった

s m i l e

ふたりで歩くには少しコツが必要だった。

彼女の歩幅はせまい。

君が来るまでできるだけ時間をかけて景色を見て覚えておこう。

自分が壊してしまった周りの風景を、 振り返ると見れる君のいる
景色を。

君の笑顔は教えてくれた。 僕の行く道を。

君と出会えてよかった。

今までとは違う世界が僕のなかでめぐる。

happy

「いつてらっしゃい」　そう言われて家を出るのも慣れてきた。
さんざん歩いてやっと見つけた生きた人達がすんでいるこの街に着いて一週間程がたつ。

その一週間、俺は懸命に職を探してやっとのことで道路舗装のバイトとして働くことができた。

むざんに壊れてしまった道路を直していく仕事をしているとまるで地球の縮図を見るようで、自分がやってきたことを後悔してむやみにむなしくなることもあったけどノアの為にもそんな文句は言っていられなかった。

一方ノアの方もどこからか内職をもらってきて二人のもうけを合わせて貧しいながらもなんとか不自由なく暮らせた。

昼は二人で仕事にはげんで、夜はお互いに色々な話をした。
ちょっとした世間話や仕事の話。

話の内容はそんなくだらないものだったけど二人で笑いあって、少しのことで喧嘩になってまた仲直りして、そんな時間が俺にとって
は大切で、いとおしくて、いつまでもこの時が続けばいいと思った

present

「ねえ、ケファって自分の誕生日覚えてん？」

ふたりにで晩飯を食べてる時に急にノアはそんな事を聞いた。

「忘れた」

俺は即答した。実際覚えてなかったし。

ノア「まったく、自分の誕生日ぐらい忘れないの！ケファの誕生日はあたしと同じ来月の2日！覚えて？」

ケファ「同じ日って…まったく同じ日なの？」

ノア「うん、ケファが生まれてから2年後のだけだね」

…そういえばノアが内職の給料から少しずつお金を引いてコツコツためていたような…なんか俺にくれっのかな。そんな事を考えて喜んでいて気付いた。

（てか、俺もなんか買ってやらんとあかんやん！けど金ねえしなあ、どおしよう…）

ノア「どおかしたの？悩んでるみたいけど」

ケファ「ん？いや別に」

ノア（？）

来月の2日まであと半月なかった。

俺はなんとか金を稼がなくてはと仕事の時間を長くした。

ノアといられる時間が短くなるのはいやだけど仕方ないべな。そう思っただけ俺は仕事にはげんだ。

そしてその日があさってに迫って俺はその日までに稼いだ金と職場から少し給料を前借りした金を持って市場に向かった。

（何がいいかなあ、やっぱり女の子だしアクセサリーのたぐいかな？）

今の時世にアクセサリーを売ってる店は少なかったが軍の目をかいぐぐって色々な物をヤミで売っている店もあった。

俺はそのたぐいの店に入ると様々なものはいったショーケースを

覗いて回った。

でもやはりこの時世では貴重でみんな高くて手が出ないものばかりだった。

半ばあきらめて隅っこ方にあつたショーケースを覗いた、いくつもの光物がついた指輪が飾つてある。

（指輪かあ、ベタだけど一番いいかな？ たしかあいつ7号とか言つてたなあ）

色々見てるとその中でひとつだけ目を引くものがあつた。

それは全体が銀色で表面に金色のカギとクロスがついてるものだった。

値段もぎりぎりで手が届く金額だ。

「これの7号ください」

俺はその店員に言った。

birthday

11月2日―

その日、少し俺は仕事を早く切り上げて家に向かった、いつも同じ帰り道で違ったのは俺のポケットに入れてあるピンクの包装紙に包まれたプレゼントくらいだ。

家のドアを開けると家の中は少しながらもあざやかな装飾がされていた。

ノア「びつくりした？さて今日はなんの日でしょう？」

ケファ「俺とノアの誕生日だろ？それくらい覚えてよ」

俺はそう言っていると彼女の頭をなでた。

居間にはいつもよりちよつとごうせいな料理がおいてあった。

ノア「えへへ、いつもよりがんばっちゃった」彼女はそう言って笑った。俺もつられて笑った。

ノア「はい、プレゼント！」二人でごちそうを食べているとノアがいきなり黒い包みを俺に渡してきた。

ケファ「開けていいんか？」

ノア「うん、どうぞ」

中に入っていたのは全体が銀色でベルト部分が黒のアナログ時計だった。

ケファ「おお、ありがとう！」

ノアは俺が喜んでいるのを見てうれしそうに笑った。

ケファ「ほい、お返し」

俺は一昨日買ったピンクの包みを彼女に渡した。内心よろこんでもらえるかドキドキだ。

ノア「わあい！開けていい？」

ケファ「ああ」

彼女は包みを開けて一瞬驚いた顔をしたと思ったたら急に泣きだした
ケファ「ど、どうした？気に入らなかった？」

ノア「うん。ちょっとうれしくて、えへへ」

彼女はそう言って涙をふいて舌を出して笑った。

ノア「つけていい？」

ケファ「うん」

細い白い指の彼女にはその指輪はとても似合った。

ノア「似合う？」

ケファ「ああ…すげー似合う」

俺がそう言っていると彼女はいきなりキスをしてきた。

ノア「ありがと…うれしい」

ケファ「どーいたしまして」

その日、初めて僕らは体を合わせた。幸せだった。幸せすぎてこわい程に。

limit

その日、俺は何度もノアの中に入り ノアは俺を何度も自分のカラダに入れた。俺にはとくに生殖行為にともなう快感なんてなかったけど、子供をつくることもできなかったけど、俺の手で、俺の力ラダ全体で彼女を包んでる事自体に意味があると思った。

その行為が終わり、隣でノアが静かに寝息をたてている中で俺は遠くで声を聞いた。

(…シュウちゃん 好き……)

おそらくそれはこの世界で唯一俺と同じ人種であろう「ちせ」の声だったのだろう。彼女も俺と同じように愛する人と一緒に暮らしているのだろうか？

少なくとも遠くで聞こえた「ちせ」の声は幸せで満ちあふれていた。

(ん?)

急に俺は鼻の下に妙に生温い液体の感覚をおぼえ、反射的にそこに触れるとそこからは真紅に染まった液体が流れ出ていた

(鼻血か…もう体が限界なのか?)

そう思いながら俺はノアを起こさないようにベッドから降りて自分の力バンから「薬」の入った薬ビンを取り出した。

その中に薬はもうひとつしか残っていなかった。

(最後の一粒か……)

俺はその一粒を口に入れ水で流し込むとノアのいるベッドに静かに戻った

なぜか最後の薬はととてもとても甘い味がしたように思えた

Love (Noah Side Story)

私とケファは同じ街で育った。

家が近かったわけもあり彼と私はまるで兄弟のようにして幼少時代を過ごした。

一緒に近くの丘へ野苺を摘みにいったり、ちょっとした悪戯をして近所のおじさんに一緒に怒られたり。

そんなことがとても楽しかったのを今でもよく覚えている

中学も高校も先輩、後輩として日々を過ごしているうちにいつからか私は彼を好きになっていった。それなのに私は彼に告白なんてできなかった。

それは私が告白して今まで築いていた「親友」としての関係をこわすことを怖かったからだ。

それでも時間はザンコクに思えるほど正確に動いていた。

「好きです」

その一言が悩んで、悩みぬいたすえ言えたのはもう彼が高校を卒業して軍に入る寸前だった。

彼は少し困った顔をしてこう言った。

「俺も…ノアのことは好きだよ。でも俺はもうすぐ軍に入るんだ。会える機会もほとんどないだろうし、もしかしたら俺とはもう会えないかもしれないんだ。それでも……いいの？」

私は無言でうなずいた

ケファ「そっか…ありがと」

彼はその場で私に軽くキスをしてくれた。すごくすごくうれしかった。

数日後、彼は軍に入隊し特別任務とやらでどこかへ行ってしまった。ほんとうは、ほんとうは離れたくなかった。ずっと一緒にいたかった

彼との再会は私が思ってたのとは遠く、ロマンチックでもなんでもなかった。

彼と離れてから1年がたち私は彼と育った街から離れ、少し離れた街で一人暮らしをしていた。その頃世間ではひどくなる一方の戦争の話題でもちきりだったけど私はほとんど無関心だった。

（ケファに会いたいな）

そんな気持ちが頭から離れなかった

その日も普段と変わらず買い物をするま世家に向かって歩いていった。その時だ

「ダダダダダダダ！」

突然少し離れた場所で耳をつんざくような銃声がして、周りの人々は声にもならない叫び声をあげて逃げていった。

怖い。なのに私は銃声のした方へ歩いていった、何かいやな予感がしたから。

銃声がやんで静まり返ったそこには私がつづくと望んでいた彼が立っていた。

顔つき、体型、そして肩にある古傷、すべてがあの中のケファそのものだった。違ったのはその腕から生えている銃。そして背中から皮膚を突き破り羽のようなものが生えていた点だった。

私はまるで悪魔のような姿をしている彼にいつのまにか「ケファ？ケファでしょ？」と聞いていた。

正直、彼だと信じたくなかった

振り向いた彼の目は私がいままで見たことのないような冷たい目をしていて。

「だれだ、おまえは」

彼は確かにそう言った――

――そして今私は彼の腕のなかにいる。あの街で再会して3カ月がた

っていた。もう彼はもとの彼にもどっていた、私の愛するケファに。彼の話によると彼は最終兵器というものになってしまったらしい。「俺はもう人を殺す為の存在なんだ」彼はそう言って今まで犯してしまった罪の重さに泣いた。

私は本当に本当に彼はかわいそうで私がその罪の意識を少しでも和らげられればなとその話を聞いたときからずっと思っている、いやそしてこれからそう思いつづける。

11月2日。私たちはお互いに誕生日を祝ったあと初めて結ばれた。本当に幸せだった、これ以上の幸せはないと思えるほどに。

最近彼は時々薬を飲んでいる。本人は「栄養剤」なんて言っているけどきつと彼の体の中にある兵器の部分が関係しているんだろう。すごく心配だ。もし彼がいなくなってしまうたら私はどうしたらいいんだろう？

どうやって生きてらいいんだろう？
というかそんな恐ろしいこと考えなくなかった。考えないようにした。

だからそんな事忘れられるように私は今のこの幸せにしがみつくとにした。

彼を愛そう―これからもずっと。ずっと。

- なかがき -

この3話はノアのケファについての思い、そしてふたりの思い出を書きました。すごく難しかったです。

男の俺にとって女の人の気持ちはすごくつかみにくいものだと思うので。

ではあと少しですがAFWをよろしくお願いします。

presentiment

「幸せとはもつとも壊れやすいものだ」

どっかの小説家がそうTVで言っていた。今思うとあの時にこの意味を考えていればもつと僕達は幸せに暮らせたのかもしれない

あの日、俺はいつもと同じように職場で汗をたらしながら働いていた。

すでに薬が切れてから1週間以上たっていた―それでも俺はまだ生きていた。呼吸をしていた。彼女に恋をしていた。

（キーン）

作業中突然耳鳴りがした。その音のあまりの大きさに俺は持っていたスコップを捨てて耳を手で塞いだ

「お、おい、ケファどうした？」

同僚の心配そうな声が近くから聞こえる。だが、その耳鳴りはどんどん大きくなり、ついには鼓膜をやぶるかのような程の大きさになった

「ッ……！」

そのあまりの痛みに座り込んでしまった時俺は確かに遠くでノアの声を聞いた

（助けて……）

それはたった一言だったがすごく悲痛な声だった。耳鳴りもすでに止んでいた。

俺は着けていたヘルメットを投げ捨てると家へ向かって走りだした

仕事仲間A「どうしたんだ？ケファの奴。尋常じゃなかったぜ」

仕事仲間B「そうだなあ。なんか今日は変な日だよ。軍の奴もきてるし、さつきそいつにケファの家の場所聞かれちゃったよ」

仕事仲間A「軍がきてるのか！なに？ケファの奴なんかしたの？」

仕事仲間B「しらねエよ。もともとあいつも流れもんだしな。さ、仕事仕事。今日も平和だいいいなア」

―何かすごい悪い予感がした―

door

なにかが俺の背中を冷たく濡らす。

おそらくそれは不安という化物だろう、俺は走った、走った。

一刻も早くノアの姿を見るため。この不安がただの不安であることを確かめるため。

そうして俺は息を切らしながら家のドアの前に着いた。

大丈夫だ

―きつとこのドアを開ければ彼女が少し笑いながら「どうしたの？」
と言ってくれるはずだ―

俺はそう自分に言い聞かせるとゆっくりドアを開けた。

ドアを開け俺の目に飛び込んできた風景は望んでいなかったものだった。

家の中は荒らされておりあらゆる家具が倒され中から服などが散乱していた。

そして廊下を抜けた先にある居間には縄で縛られて身動きのとれないノアと彼女に銃を向けている男―俺の元監視役。カイン―がいた。奴は少し頭がおかしくなってるらしく、口の端からよだれを垂らし笑っていた

カイン「やつとお戻りかあ、リイパアア―！」

俺は息を荒げたまま聞いた。

ケファ「なぜ来たんだよ？ノアを放してくれ」

カイン「ノア！？ああこの女のことね、まったくこんな女ごときに情がうつって軍から逃げるとはまったくたいした男だなあおまえは！」
ケファ「……いいから放してくれ、たのむ。」

奴は俺の頼みを無視してため息をついた

カイン「まったく、おまえをロストしたせいで俺はクビだつてさ。これから俺の人生まっ暗だぜ……だからおまえも道連れだ。俺の人生こわしたおまえなんか幸せにしてやらねえよ、絶対な」

そう言っていると奴はノアの頭に銃を押しつけた

ノア「ッ……」

ケファ「やめろ！わかった。俺は軍に戻る！だから彼女を放してやってくれよ。お前も元の役職に戻るように上層部に言うから、頼む……」

奴は銃をノアから放すと言った

カイン「そうそう。それを待ってたんだよ」

奴はそう言っでにんまりしながら彼女の縄をほどくと彼女の頭から銃を離れた

カイン「ほら、はやくリーパーのもとへ行つてやれよ」

そう言っで奴は近くにあつたイスに座つた。

たとえば俺が軍に戻ることになつても彼女が生きてさえいればそれでいいと俺はその時思つた。

たとえば一緒にいらなくても彼女が大切だつた。

ballet

縄をほどかれた彼女はまだ恐怖で足がおぼつかないらしくふらふらしながら俺に向かつて歩いていった。

俺は彼女のもとへ走り寄ると彼女を強く抱き締めた

ノア「ケファア、こわかったよお」

ケファ「よかった…」

俺は彼女を抱いたまま少しだけ目をつぶった、彼女の体温を確かめたかったから、なにより安心したかったから。

その時だ。

「パン」

ひどく乾いたどこかで聞き覚えのある音がした

それが戦場で聞こえていた銃声だと気付いたときには彼女の体から力が抜けていた。

わけもわからず俺は彼女の体を見回した。そこにあったのはちいさな穴、内臓をつきぬけるように彼女の下腹部に穴が空いていて、そこから大量の血が流れていた。

俺が驚いているとまだ銃口から煙が出ている銃を持った奴の笑い声が聞こえた

「ハハハハハハア！バカだなアお前は、もう軍はおまえのことなんて必要としていないんだよ。なんせJAPAN側も「ちせ」ロストしてんのがわかったんだからな、普通に攻撃しても連合国の勝利は確実なんだよ。だから俺もいらなんてわけた。わかったか？」俺が殺気に満ちた目で奴を見ると奴はこう言った

「なぜ撃ったか？そんな野暮なこと聞くなよ。言っただろう、おまえなんか幸せにしてやんねえって」

そう言いながら奴は狂ったように笑い続けていた

(ブツ……………)

奴の笑い声の中何かが俺の中で切れた。

「うあ あ あ あ あ あ あ あッ……！」

全てが消えた―

彼女と1カ月とちょっとだけの間幸せに暮らした街が。

『俺が消した』

俺はこれでまた罪を犯した。

彼女を失う怒りをあてる場所がなくて俺は世界にあるもの全てを憎み、この街があつた痕跡を全て消してしまった。さっきまでここに生きていた人々も共にして。

そして周りがすべてガレキになった後、俺は血まみれの彼女を抱き締めながら泣いていた。

いくら彼女から流れだす血を止めよう手で押さえても一行に止まらなかった。流れる血の量が増えていくたび彼女の命が少しずつずれていくのを感じた

ノア「ケファ……？」

ケファ「ノア？喋るな、傷が塞がらない」俺の声はもう震えていた。

ノア「もう……いいよ、私はもう……」

ケファ「バカ、何言ってるんだよ」

そう言っていると彼女は少しほえんだ

ノア「……ケファ、ありがと。」

わかっていて。彼女がもう助からないことなんて、でも俺はあきらめたくなかった、彼女を失いたくなかった。

ノア「ケファ……お願いがあるの」

ケファ「何？」

ノア「私を……私を忘れないでね？お願い。」

ケファ「バカ、あたりまえだ。忘れるもんか。」

ノア「ありがと……これケファが持ってた」

彼女は自分が着けていた指輪をふるえる手ではずすと俺に渡した。

俺が彼女の誕生日に渡した銀の指輪。

ケファ「うん、わかった」

俺がそう言つと彼女は精一杯つくつた笑顔で俺にキスをした。その最後のキスは血の味がした。唇が離れると急に彼女は泣きだした
ノア「うつうつ、ケファア、やつぱり死にたくないよお、まだ生きたいよお、これからケファとたくさん楽しいことがあつたはずだつたのにい、こんな終わり方やだよお」

ケファ「まだ終わりじゃないよ、まだ死なないでくれ、頼む、頼むよ。俺をひとりにしないでくれ」

俺は泣きながらノアに無理だつてわかつてる頼みをした

ノア「ごめん、ごめんねええ…ケファア」

彼女は涙をこぼしながらそう言つとゆつくりと目をつぶつた。そしてもう起きることのない眠りについた。

ケファ「ノア？おい、嘘だろ？嘘だといつてくれよ？まだだろ？まだ俺等にはこれからがあつていいだろ？答えてくれよおノア」

俺は泣きじゃくりながらまだ温かい彼女を抱き締めた。彼女が死んだなんて認めたくなかった

「うつ、うつ、うわあああああ」

―認めたくなかった。―

God

なぜ神は俺を愛してくれないのだろうか？

俺が幸せになろうとするのを邪魔するのだろうか？

これは俺が犯してきた罪に対する罰なのだろうか？

彼女はもう笑わない。

彼女はもう泣くこともない。

俺はもう彼女の体温を感じることもない。

俺はもう彼女のうたのような心臓の鼓動を聞くこともできない。

――彼女とはもう会えない――

彼女を失って俺が生きていく意味はあるのか？

誰か教えてくれ。

俺はこれからどうすればいいんだ？

どうすればいいんだよ……………？

俺は冷たくなってしまった彼女を抱き締めた。

dark

―恋なんてしなければよかった―

大事なものを失ってから気付くことはたくさんある。どんな幸福にもその側には闇があつてその闇はその幸福を一瞬で飲み込んでしまふほど暗く、そして大きかったんだ。

俺は彼女の身体が崩れていつてしまふのを見たくなくて近くの丘に彼女の墓を作った。

そして俺はその近くで座りつくしていた。すでに立つて歩く気力もなかった

（なぜ俺は生きている…なんの罪も犯していない彼女が死んで、許されることの無い罪を犯してきた俺が生きているんだ…おかしいじゃないか）

俺の頭の中でその言葉がずっと巡っていた

「死にたい」

いつのまにかそんなことをつぶやいていた。彼女がいなくなったださびしさに身を裂かれながら世界で誰からも必要とされずただ自分の罪と向き合つて生きていくなんて俺には無理だった。

彼女との約束なんて守れなかった。

die

死ぬために色々なことを試した、上空高くまで飛び上がって一気に羽を消して地上まで落ちてみるとか、拾ったガラスで本来心臓がある場所を力いっぱい突き刺してみたりした。

でもやっぱり死ぬことはできなかった。

俺は普通の人間じゃなくて人間が作り出してしまった最終兵器だから。

そうしていてある事に気付いた

「ちせ」

俺と唯一同じ最終兵器にして俺以上の力を持つ物体。

（あの子なら俺を殺すことができるんじゃないか？）

そう思った俺は連合国軍によって危機に落ちやられている「ちせ」を保有するJAPANに向かって飛び立った。

Chise and I

衛星で位置を検索してホツカイドウの展望台で見つけた「ちせ」は普通の女の子にしか見えなかった。こんなに幼い子が今まで数えきれないほどの人々を殺してきたなんて信じられなかった。「ちせ」はなにやらノートに何かを書いているようだ。

ケファ「ちせ……さん？」

俺がそう呼び掛けると彼女は急いでノートを隠すと怪訝そうな顔をして振り向いた。

ちせ「……えっと、どちら様ですか？」

ケファ「ケファ……連合軍内識別名称リーパー、識別番号USFW 1001・387C」

俺の名前を聞いた途端「ちせ」の雰囲気は一気に変わった

ちせ「何しにきたん？私と戦うのなら容赦なく殺すよ？」

ケファ「戦う気はない、俺は君に殺されにきたんだ……」

ちせ「……」

ケファ「もう俺を必要としてくれる人は世界にいない……もう疲れたんだ。休ませてくれ……頼む」

「ちせ」の様子は元に戻っていた

ちせ「ごめんなさい。一体何が……あつたんですか？」

俺は「ちせ」に事のあらましを話した。ノアの事、そして彼女を失ったこと、それで死のうと思っていることなど。この話を彼女にすることに意味は無いだろうけど俺はなぜかそれを「ちせ」に話した話を聞きおわって「ちせ」はうつむきながら

ちせ「……本当に……いいんですか？死んじやうんですよ？」

そうつぶやくように言った

ケファ「ああ……君にしかできない事だ……頼まれてくれるか……？」

ちせ「……わかりました。でも1日いただけませんか？あなたを……死なすのには1回パワーをチャージしないとたぶん……。ご、

「ごめんなさい」

ケファ「わかりました。ありがとうございます」

ちせ「では、ちょ、ちょっと失礼しますね。明日またここで」

そう言って彼女は飛び去っていった。

……俺の話を聞いてから彼女はずっと泣き出しそうだった。そうい
うところは少しだけどほんの少しだけどノアに似ていた

ring and watch and…

思わぬことで1日予定が空いた俺は少し身体を休めるために展望台の坂を降りたトコにあった少し古い、玄関の壊れていた家に入った、地震の跡なのかはわからないが壁にはたくさんさんのひびが入っていた。おそらく家の主は避難した後なのだろう。

「ドタッ！」

やはり今までの疲れが効いていたらしく俺は床に倒れこんだ。と、同時に太股らへんに痛みをおぼえた。

どうやらポケットの中に何か入っているらしい。俺はポケットに手をいれ何が入っているのか探ってみた

手に触れたのは鉄の冷たい感触、なにかわつかのようなもの。

何かと思つて出してみるとそれはあの時彼女が俺に持たせた指輪だった。何気なくはめてみようとするがそれは小さすぎて小指の間接までしか入らなかった。

「はは、あいつ指ほせえのなー」

そう言いながらも俺の目からは涙が出てきそうだった。

そして気付いた、俺のしている時計ーノアからもらった時計の底からすこし紙切れみたいのがはみ出していることに。どうやらもともと底がスライドして写真入れみたいになつてゐるらしい。なんだろうと思つてその紙切れを出した。

「……………バ…カヤろ…っ……………」

もう涙が止まらなかった。我慢なんてできなかった。

『この贈り物が幸せの約束になりますように。

これが2人の絆となりますように。

幸せになろうね。

ノア』

そこにはちいさな彼女の写真と小さな紙に彼女の丸っこい字でそう書いてあった。

day dream

「生きてることは罪じゃないの。死なないで。私が…私が生きていたことをなかったことにしないで、お願い。人が一番怖いのは死ぬことじゃなくて忘れられることなの」

不意にそんな声が聞こえた気がした…たしかにノアの声だった。

「俺には…無理だよ。ひとりぼっちで生きていくことなんて」

俺は何も考えず独り言のようにノアの声に話し掛けた。

「ごめんね…先に死んじゃって。本当は生きていたかったんだけど神様はそれを許してくれなかったみたい…だからこそ生きて。お願い、私の存在をなかったことにしないで…？」

「でも…」

『自分勝手な事言ってるよね。ごめんね、ごめんなさい。でもケフアにはどうしても生きていてほしいの』

「……………」

『もうわかってるんでしょ？もうこの星は1週間ももたないこと』
「わかってるよ。だったらいいじゃないか。どうせ地球はなくなるんだ、そこで俺は死ぬ。それが少し早くなるだけだ。問題はないだろう？」

『……バカ！あなたもひとりの人間なの。なんで自分の事大切にしてあげられないの？いくら今まで人を殺してきたからってあなたは人間なのは変わらないんだよ？』

「……俺が人間？」

『当たり前でしょや！人間じゃなかったら笑うこともないし泣くこともないでしょ？ケフアさっき泣いてたでしょ！』

私だって人間なんだ。生きていたかったんだ。だからせめて私の存在をこの世界からなくなさないで…』彼女の声は半ば泣き声だった。

『ごめん、もう時間が無いんだ。そろそろ消えるね、死なないで、お願い。ごめんね？…好きだよ』

そう言ったとき彼女の声は聞こえなくなった――

もしかしたら俺の幻聴だったのかもしれない、でも俺にはそうは思えなかった

「……ノア」

そう呼んでみた。誰もいない部屋にその声は吸い込まれていった。

choice

翌日「ちせ」が来たのは昼近くになってからだっ

ちせ「こ、こんにちは。少しチャージに時間がかかってしまいまし
て…ご、ごめんなさい」

ケファ「いいや、構わないよ。それよりすまないが頼みたいことが
あるんだ」

ちせ「は、はい。なんですか？」

ケファ「君と合体させてくれないか？」

ちせ「え！！で、でも私にはシユウちゃんがいるし！む、むりです
よあ…」

ケファ「そういう意味じゃないよ。同じ最終兵器として、君の兵器
としてだ」

ちせ「え…？な、なんですか？」

ケファ「この星がもうなくなってしまふのを知っているだろう？…
今の兵器として弱った俺ではたぶん生き残れない。俺は俺の犯した
罪を償わなければいけないんだ」

ちせ「…………でもこの星はもうなくなります。あなたの犯した罪も
たぶんなかったことになりますよ。それなのに…」

俺は彼女の声を遮って

ケファ「だからこそだ。俺は生きてその罪と戦う。だから頼む」

そう言つて俺は彼女に頭を下げた

ちせ「…………わかりました。じゃあ、すみませんが兵器の形になつ
てもらえますか？」

ケファ「ああ…」

妙な機械音とともに俺は人間ではない物体になった。兵器としての
俺。無形でなんの形にもなれ、人を殺すのに最も適した形。そして
「ちせ」も同じ姿になった

ちせ「いきますよ…」

ケファ「ああ……」

音もたてず、青色の稲妻を出しながら俺は「ちせ」の中に吸い込まれていった

u t e r u s

明るい――

どこだここは…

そうか。「ちせ」の中だ。彼女の中は赤く暖かった。「ちせ」の中にいると「ちせ」の考えている事がわかる気がした。

彼女にも愛する人がいて、その人もまだホッカイドゥで生きていること。

それとどうやら彼女はこの星が滅びるときに全てのものを破壊する気らしい、誰も苦しませないために。やさしい子だ。

俺がなれなかった分だけ彼女は彼女の恋人と愛し合ってほしい。そう心から思った。願った。

俺はここで永遠に自分の罪と闘っていいこう。

そしてここで彼女を――ノアを思い続けよう、愛し続けよう。思い続ければ俺の中で彼女の存在は消えない。

永遠に永遠に――

「ノア。俺は約束を守れたかな？」

その問いに答える声はなかったけど

ちいさな写真の中の彼女はすこし笑いながら泣いてるみたいに見えた。

uterus（後書き）

思えば一年前に書き出してやっとできた作品です。

戦争は意味がありません。ただ悲しく死んでく人が出るだけです。ここに出てくるケファやノア、ちせはみんな被害者なんです。

ちなみに16のsmileは随所バンプのスノースマイルから出させていただきました（汗）

最後にこんな俺の我儘をきいてくださったちびさん、そして読んの方に深く感謝しております。

2005.7.11 aki

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1301a/>

another final weapon

2010年10月9日19時53分発行